

県立淡路景観園芸学校

寄せ植えなどを通じ、認知症高齢者らに機能回復訓練をする園芸療法士。国内唯一の公立養成機関である県立淡路景観園芸学校(淡路市野島常盤)が、福祉施設などへの派遣事業を本格的に始め4月で

丸1年を迎える。実験的に導入した2006年11月ごろと比べて派遣回数は倍増。「入所者の表情が明るくなった」などリハビリ効果の科学的な実証も得た。園芸療法士を積極的に採用する動きもある。心身に障害がある人たちの治療に生かす取り組みが県内で広がりつつある。

(淡路総局・西尾和高)

園芸療法士の本格派遣 丸1年へ

広がる緑のリハビリ

回数増加、科学的実証も

園芸療法は、植物とかかわることによって高齢者や、心身に疾患のある患者の精神的ストレスを軽減する。阪神・淡路大震災で多くの人が被災し、心のケアの重要性が注目されるようになり、同校は〇二年、園芸療法課程を設けた。園芸療法士として県知事が修了生を認定。養成した人材を活用しようと、〇六年十一月に派遣事業を始めた。

同校は現在、淡路島内や神戸などの福祉施設十三カ所に園芸療法士を派遣し、認知症の高齢者らに月一、二回、プランターづくりなどを指導している。会話が「生きる意義を見つけた」という参加者も。淡路市の介護老人保健施設の作業療法士前谷一恵さん(三)は効果を実感する。

〇七年度の受け入れ先は、前年度より三施設が増え、リハビリ系病院や障害者の作業支援センターなどに拡大し

寄せ植えなどを通じ、お年寄りらの心を解きほぐす園芸療法―淡路市大町畑、介護老人保健施設



た。派遣地域も、西宮、宝塚と県内各地に広がり、派遣回数も計百九回。園芸療法士登録数も二十八人と、前年度からそれぞれ倍増した。極的な動きも出ている。

園芸療法が広く知られるようになる中、同校は昨年六月、リハビリ効果の科学的な実証に成功した。効果を疑問視する声に対し、普及の弾みとなる大きな成果を挙げた。

ヘモグロビンの濃度変化から脳の血流を測定する赤外線装置を使い、園芸作業が精神機能に与える影響を調べた。二十―五十歳の健康者二十一人に実施した結果、作業中は、精神機能の働きと関連する前頭葉の血流が一時的に増えることが明らかになった。

同校の豊田正博(園芸専門員)は「初めて科学的に効果を実証できた」と目を輝かせる。

一方、園芸療法士の立川

理絵さん(三)は「本当に認知されるには、まだまだ課題は多い」と指摘する。高齢者と園芸療法士が花を育てる過程では、水やりなど日々のかわりから効果が分かる。このため、現行の月一回程度では、患者の精神的変化を読み取りにくいという。立川さんは週一回は必要。『療法』と呼ぶからにはもっと集中的にお年寄りらと向き合うべきだと訴える。

認知症の場合、症状の度合いを考慮しなければならぬ。い。『マンツーマン指導がよいのか。グループ活動がよいのか』。今後は、お年寄り一人一人に合ったプログラムづくりも問われる。

同校普及指導課の中谷義孝課長(五)は「効果の実証は、大きな一歩だった。今後、より専門的に園芸療法を進めていきたい」と話して

ニュース&
HYOGO
兵庫